

Sustainable Energy for All

計量分析ユニット

需給分析・予測グループマネージャー 研究主幹

末広 茂

今年も、節電の夏がやってきた。地域によって差はあるが、全国平均で 2010 年比 7% 程度（最大需要ベース）の節電が必要となる。万一のための計画停電の準備も進められている。昨年 3 月には、実際に東京電力管内の一部で計画停電が実施された。電気のある暮らしのありがたさを、まさに身をもって体験したところである。

一方で、世界には電気を利用できない人々が 13 億人もいると言う。世界人口の 5 人に 1 人だ。電気が繋がっている地域でも、10 億人もの人々は断続的にしか電気を使えない。また、30 億人が伝統的なバイオマス燃料（薪や家畜の糞など）で煮炊きをしている。こちらは、およそ 2 人に 1 人の割合である。これらの燃料は前近代的な竈（かまど）で使われており、煤煙対策が施されていない。屋内に充満する有害な煙を吸い込んで肺の病気を患い、毎年 200 万人もの女性や子供が命を落とすそうだ。

電気があれば、夜間に（昼間労働に従事している）子供が勉強できる。水をポンプで汲み、農作物に撒くことができる。食品や薬を冷蔵庫で保存できる。新しいコンロは危険な煙を排出しない。時間をかけて薪を集める必要もない。女性を重労働から解放する。

こうしたエネルギー貧困の問題は、日本では馴染みが薄いかもしれないが、国際的に関心が高まっている。国際連合は、このようなエネルギー貧困を解消するために、今年 2012 年を“the International Year of Sustainable Energy for All”と設定した。「2030 年までにすべての人々に近代的なエネルギーを」という目標を掲げ、広く、各国政府、民間企業、社会団体などに積極的な関与及び資金提供を呼びかけている。なお、IEA（国際エネルギー機関）の試算によれば、この目標の実現には、1 兆ドル（毎年 480 億ドル）もの投資が必要とのことである。ただし、エネルギーインフラ自体は貧困を解消せず、「アクセスできるが、支払えない貧困」が増えるだけかもしれない。エネルギー代金を支払うための所得改善対策も同時に実施されるべきであろう。

節電の夏を乗り切るために、健康を損なってまで電気の使用を我慢する必要はない。できる範囲で行えばよい。その際、世界には電気を全く使えない人々がいることを、ぜひ頭の片隅において、電気を大切に使うだけでいいと思う。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp